

慶應義塾大学外国語教育研究センター

Newsletter Vol. 8

Mar. 2006

Hiyoshi Research Portfolio 2005 参加報告

外国語教育研究センター助手 倉館 健一

Hiyoshi Research Portfolio 2005(日吉研究支援センター主催)は、12月20・21日の両日、日吉キャンパスにおける研究活動の広報を目的として今年初めて開催された(<http://www.hc.keio.ac.jp/ora/HRP/>)。メイン会場となった来往舎の大会議室・中会議室では、ポスターセッションが行われ、外国語教育研究センターからは全18枚の参加を行った。各ポスターでは、センターの役割、研究・教育・支援活動についてのまとめとともに、センターの6つのプロジェクト(政策提言、自律学習・ICT、慶應義塾の英語一貫教育を考える、異文化間コミュニケーション、e-Learning)の概要紹介とこれまでの活動報告を行った。今回のHRPはキャンパス内外にセンターの活動をアピールする絶好の機会になったように思う。また教育研究活動に携わってくださる所員の皆さんにとっても、これまでのセンターの活動を俯瞰できる資料になったのではないかと考える。

20日には、午前・午後の2部構成で自律学習・ICTプロジェクトのシンポジウム、「ICTを活かした新しい学習環境構築のために」を行った。第1部(総合政策学部・國枝孝弘司会)では、4つの授業実践プレゼンテーションが行われた。自律型CALL教材の構築(京都大学・大木充)、遠隔テレビ会議システムを用いた国際交流プログラム(早稲田大学・砂岡和子)、LMSの利用とCALLシステムを用いた作文指導(境副所長)、メディアミックスによる授業構築(総合政策学部・國枝孝弘)である。それぞれのアプローチからICTの可能性を体現した試みをご紹介いただいた。



第2部(金田一所長司会)は、2本の基調講演とこれを受けてのディスカッションで構成された。まずはじめに、自律型CALLを精力的に研究されている京都大学人間・環境学研究科大木充教授から「自律型CALLを活かした新しい学習環境の創出」という内容でご講演いただいた。研究者の養成を絶対の使命とする京大での外国語教育は我々の目指している教育とは方向性が異なり、ICTへの取り組みについてもある程度温度差がはっきり出るとは思わなかったが、実際にはそれほど両者の立場に違いないことが判明し、興味深かった。また自律型CALLについては精緻な理論構築が行なわれており、会場からの反響も大きかった。引き続きCross Cultural Distance Learning(CCDL)を核としたテレビ会議ネットワークによる協調学習を確立された早稲田大学政治経済学術院砂岡和子教授に「交流型外国語能力をはぐくむ言語教育」についてお話いただいた。次世代学習環境構築への嚆矢となる刺激的な試みであり、早大の極東アジアにおけるネットワーク構築事業の壮大さに圧倒されるなか、高度なコミュニケーション能力、交渉能力の養成という極めて水準の高い言語運用能力開発に取り組まれている姿に感銘を受けた。その後、4名のディスカッサント(境一三、江波戸慎・國枝孝弘・佐藤望)がそれぞれの立場から発言し、またその後かなりの質疑が会場からも挙がるなど、盛況となった。

今回のシンポジウムにより、慶應義塾らしい教育のあり方について、より具体的な形が見えてきたように思う。今後ともこのようなシンポジウムには是非積極的に参加をお願いしたい。

CONTENTS

研究プロジェクト活動報告

Hiyoshi Research Portfolio 2005 参加報告	倉館 健一	1
メディアで学ぶドイツ語	境 一三	2
メディアで学ぶフランス語	國枝 孝弘	2
CEF勉強会について	境 一三	3
女子高の外国語教育	梅澤 直美	3

教育活動報告

外国語教育研究センター設置科目		
この1年を振り返って		4
2006年度設置科目一覧		6
アカデミック・ライティング・コンテスト2005		7
イタリア語表現技法紹介	白崎 容子	8

Announcements

田丸公美子氏講演会 開催決定		8
プロジェクトスペース竣工について		8
ALC NetAcademy利用について		8

編集後記

2005年度事業報告		9
------------	--	---

自律学習・ICTプロジェクト：実験授業「メディアで学ぶドイツ語」

経済学部教授 境 一三

この実験授業は外国語教育研究センターの研究プロジェクトの一つである「自律学習・ICTプロジェクト」の活動として、2005年度10月に開講しました。すでにフランス語では「メディアで学ぶフランス語」という授業を2004年度10月期から行っていますが、ドイツ語は今回が初めてでした。

「メディアで学ぶ～語」という授業は、NHKラジオやテレビの放送、教室での対面授業、Webを使った指導などをどのように組み合わせたら学習を促進することができるか、ということの研究するためのもので、社会人を対象として、慶應義塾外国語学校を舞台に行われています。

今回の授業では、受講者は、私が担当した「NHKラジオドイツ語講座入門編」を聴いた上で、週に一度日吉に来て対面授業に参加するという形を取りました。さらに、MoodleというWeb上のLearning Management Systemでは、受講者は毎回私の授業を5段階で評価し、それぞれ学習日誌を付け、Hot Potatoesで作った練習問題に取り組みました。また、掲示板では活発な質疑応答が行われました。私のミスで、途中でMoodleのデータを失ってしまうという事故はあったものの、受講者の皆さんの熱心が講座全体をリードするという、理想に近い学習になったと思います。

この講座を通して改めて知ったのは、ラジオの前で一人で勉強するのはとても大変なことなんだ、ということです。文法や語彙の学習は何とか自分でできて、やはり発音のチェックや対話練習は一人ではできません。対面授業ではこれを補うことに重点を置きましたが、皆さん生き生きと大きな声を出し、ディアロークに取り組みでいて、こうした練習に対する渴望を感じました。

この授業は「メディア・ミックス」が表のテーマだとすると、裏のテーマは「学習者中心性の促進」や「学習意識の涵養」でした。メディアのさまざまな機能を使いながら、これらのテーマの追求がかなりできたのではないかと考えています。これも素晴らしく情熱に溢れた受講生のおかげだと感謝しています。



「Moodle」画面

自律学習・ICTプロジェクト：実験授業「メディアで学ぶフランス語」

総合政策学部助教授 國枝 孝弘

この実験授業は、外国語教育研究センターの研究プロジェクトの一つである「自律学習・ICTプロジェクト」の活動として、2005年10月から2006年2月まで行われた。社会人を対象とし、慶應義塾外国語学校の枠内に設置された。受講者は9名。このうち8名が何回かの欠席はあったものの最後まで出席した。

この実験授業の目的と構成は上掲(境報告)の通りであるが、フランス語に関しては、2004年10月期の「メディアで学ぶフランス語」ラジオ編(古石担当)とテレビ編(國枝担当)、2005年4月期のラジオ編(古石担当)が実施されており、今回はそれに続く4期目の開講となった。

学習者は、毎週月曜日の夕方6時半から三田キャンパスで対面授業を受け、その晩11時半からNHKテレビ「フランス語会話」を見て、授業・番組の感想などをWEB上のブログに書き込んで1つのクールが終了する。教員は書き込みを見ながら随時コメントを記入する。

一般的に、テレビの学習者は単位などの外的な強制によるのではなく「自発的に」学ぶ「孤独な」学習者が多い。その分強い意志を持って学習に臨まなければ、いわゆる三日坊主になってしまいがちである。また、社会人の中には、週1回の対面授業でさえ、毎週継続して教室に通うのは大変で、仕事の都合で欠席せざるをえない場合もまれではない。しかし、メディア・ミックスの学習なら、対面授業に出席できない日があっても、テレビ番組でその週の学習内容をフォローし、わからない点はWEB上で質問できるので、次回の授業まで意欲を低下させることなく学習を継続することができる。

今回、授業を行って実感したのは、WEBへ書き込むことのストレスが人によって大きく異なるという点である。普段から書くことが好きで、自分の考えをオープンにすることを厭わない人がある一方で、投稿する前に何度も何度も清書をして、ようやく感想をアップするという人もいた。こうしたストレスの格差は、WEB上での交流の活発度に大きな影響をもたらす。今後は「書く」という行為が、「自分の学習の意識化」にどのように結びつくのか、学習者にしっかり理解してもらうことが重要になるであろう。

今までの「メディアで学ぶ～語」はNHKのテレビ・ラジオ番組を中心に構成されてきたが、今後はWEB上で動画や音声の教材を配信し、それと対面授業を組み合わせることも十分可能である。その場合には、ラジオの応用編を除いて対象を初心者限定しているNHKの番組を補う意味でも、各学習者のニーズに合わせた様々なレベルのWEB教材が求められるであろう。

今回の実験では対面授業を14回しか設けられなかったが、今後はこれをモデルケースとし、さらに発展的な形態での実験授業も開講してみる価値があると思う。むしろ、それらが自律学習と協働学習を組み合わせ、より精緻な授業カリキュラムにもとづくことは言うまでもない。

政策提言プロジェクト：CEF勉強会について

経済学部教授 境 一三

ヨーロッパでは、2001年に欧州評議会が『外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment』（通称CEF）を公表し、評議会加盟各国ではこの参照枠に準拠した外国語教育を行うべく、さまざまな改革が実行されています。一方、日本では今のところまだヨーロッパに匹敵する言語政策、言語教育政策は存在していません。そこで当センターの研究活動は、これを大いに参考にして、日本独自の言語政策、言語教育政策を立案すべく準備を進めていく必要性を強く感じています。



このような考えから、政策提言プロジェクトではCEF勉強会を開催しています。第1回は、1月31日に開かれ、本プロジェクトのメンバー以外からもCEFに関心を持つ多くの参加者にご来場いただきました。この日は初回でしたので、まずCEFの基本的な考え方から勉強しようということになり、その成立の背景と概要について境がお話した後、CEFの考え方に基づいた言語ポートフォリオについて、具体的な作業を交えながら助手の倉館さんが説明しました。参加者は、「自己紹介ができる」というような、「できる」項目(Can-do List)をチェックするなどの作業を通して、学習者が自分の言語学習歴と現在の能力を意識化するプロセスを体験できたと思います。

3月4日に開かれた第2回では倉館さんが担当し、CEFが依拠する「行動中心主義」というものが、言語教育のメトロロジーの歴史においてどのように位置づけられるのかということを取り上げました。はじめに1840年代から現代に至るまでの、フランスにおける外国語教授法の歴史をまとめた年表を概観した上で、ドイツやフランスで発行された代表的な教科書数十冊を実際に手に取り、それらが年表のどこに位置するのかを当てていくという作業を行いました。参加者は、この作業を通じて、さまざまな教授法の差異や特徴を具体的なイメージを伴って認識できたばかりでなく、各教授法が先行する教授法の欠点を克服するように歴史的發展を遂げた結果、プロジェクトやシナリオを中心としたタスクベースの学習法、すなわち「行動中心主義」という考え方に基づく教授法へ行き着く過程を実感できたのではないかと思います。



CEFはヨーロッパの複言語的社会的状況を背景として成立したものですから、それを日本に応用することは意味がないのではないかと、という考え方があります。しかし、程度の差こそあれ日本社会も徐々に複言語・複文化化しているのではないのでしょうか。こう考える時、CEFが示した「アイデンティティーを重視しつつ相互理解」するための「複言語・複文化能力の養成」という外国語教育の理念と具体案は、私たちにとって重要な研究対象であると思います。今後の勉強会の進展が楽しみです。

一貫教育校の外国語教育(7)

女子高の外国語教育

女子高等学校教諭 梅澤 直美

[カリキュラムについて]

女子高では、1年次に必修科目(英語Ⅰ)、2年次に必修科目(英語Ⅱ)と必修選択科目(外国語Ⅱ)、3年次に必修科目(リーディング)と必修選択科目(外国語Ⅲ)を設けています。必修選択科目の外国語で学ぶことのできる言語は英語・ドイツ語・フランス語で、生徒はそれらの中から1科目を選択し2年間継続して履修します。さらに、2年・3年次には自由選択科目として英語(総合/講読/OC)・ドイツ語・フランス語・中国語の講座が設けられますので、外国語を学ぶ機会が広がります。

女子高の1クラスの人数は約48名ですが、1年次と2年次の必修科目は、1クラスを2つに分けて行う分割授業が取り入れられています。特に1年次では、今年度から習熟度別の分割授業となり、英語を苦手とする生徒には基礎力の定着を図り、英語を得意とする生徒には発展的な内容まで習得させる試みがされ始めました。このような分割授業と数多くの選択科目のおかげで、女子高では、概ね少人数での語学教育が実現されているということが出来ます。また、現在外国人の講師が5名おり、日本人教員とのチーム・ティーチングが、リスニング、スピーキング、ライティングなどの分野において全学年で行われています。

[海外交流について]

女子高ではハワイのプナホウ高校と夏季休暇中に1ヵ月の交換留学を行っています。毎年10名前後の生徒が参加している他、ロンドンやワシントンD.C.の高校との交換留学も行われています。長期留学としては、国際ロータリークラブやAFS等の機関を通しての留学制度もあります。毎年国際ロータリークラブからの留学生も受け入れており、現在はドイツとフィンランドの生徒が2学年に在籍中です。また、2000年からは、海外の学校とインターネット等を通じて討論を行う遠隔会議が試みられています。

外国語教育研究センター設置科目 この1年を振り返って

英語最上級 アドバンスト英語

David Shea, Associate Professor, Faculty of Business and Commerce

The Advanced English Seminar sponsored by the Research Center for Foreign Language Education is an attempt to give returnee students at Keio a chance to maintain their English proficiency and develop the academic language skills that most only began to acquire when abroad. The course aims to provide language development through a sustained focus on interesting, relevant content. The idea is that through study about an issue, students use the discursive and linguistic resources of language involving explication, argumentation, citation, as well as vocabulary and grammar, etc.

Over the past two years, the Advanced Seminar I have taught has given students chances to discuss assigned readings and develop a grounded understand of the fundamental issues related to intercultural communication, bilingualism, and second language acquisition. In addition to developing understanding, students are "pushed" to express their own ideas in response to the readings, and it is in this process of production that students make ideas and the associated words their own. It is when students express ideas that they solidify understanding.

In practical terms, I organized the class around sets of assigned readings. In the first year I taught the class, the chosen topic was Intercultural Communication; the second year involved a combined topic of Second Language Acquisition and Bilingualism. I wanted to allow students to take the class a second time, although no one actually signed up. Students also reported that the primary reason for taking the class was to keep up language proficiency and discuss topics in English. Further, students reported that discussing the same topic for the entire year grew stale. As a result, I divided the second year into semester-length courses with distinct, but related topics.

In-class discussion centered on the articles and proceeded in an informal, interactive style, often following a set of 5-10 discussion questions I prepared ahead of time. Students were good at answering the questions, but less adept at critical response and analysis. In fact, a number of students claimed to be most confident with teacher-fronted lecture. One of the challenging features of

the class was to get students to talk actively and engage with the ideas generated by the readings in a critical and analytic way.

However interactive the discussion became, though, assigned readings inevitably positioned students as recipients of knowledge. Following socio-cultural theory about learning as shifting participation, I required students to design and implement individual research projects in which they collected data and carried out original analyses. I wanted students to generate their own interpretations, rather than rely on ready-made theories and established interpretations, with the goal to develop understanding through grounded inquiry. This process of active engagement did a number of things. First, it pushed students to synthesize the information they read and then put that information in the service of their own analyses. The information became more relevant, more personal, and more meaningful. Awareness also increased as students participated as researchers talking about their own ideas. In effect, students began to shift from receptive understanding to creative, constructive engagement with academic knowledge.

Within the community of practice metaphor, learning is not simply information that students have inside their brains, but rather what students do as speakers, writers, and researchers. Learning, whether language or content knowledge, involves a shift from the limited peripheral participation of a novice toward the more independent practice of an expert who stands in the center of an academic discourse community. For students, this community was not only the teacher and fellow students in class, but also the wider audience of writers and researchers of the book and journal articles that students were reading.

In sum, the Advanced Seminar is a challenge for students, but also an important way to maintain the English language skills first acquired abroad. The course is also a means whereby students develop the advanced discourse of academic English, which they will use after graduation in increasingly international communities of practice.

英語ドラマ

法学部教授 横山 千晶

外国語教育研究センター設置『英語ドラマ』クラスは今年で2年目を迎えた。練習したドラマを必ず公演する旨をシラバスで明記したが、10名ものやる気のある学生が集まってくれた。人数が確定次第、今年はオスカー・ワイルドの『ウィンダムミア夫人の扇』を演ずることも早々に決定した。今年のクラスの特徴はなんと言ってもその一致団結力。すがすがしいまでの思いやりの気持ちは、自分のせりふをすべて覚えた学生がほかの人のパートまでを覚えて、解釈や発音、そして演出に関しても助言を与えていく練習シーンで見取れた。そのために自分たちで演出も工夫できたし、キャラクターひとりひとりが実に際立っていた。外国語教育研究センター設置のクラスのよさは、実は学部も学年も、そして英語のレベルも皆まちまちであるということだ。偶然にも原作を翻案した映画が封切られ、シナリオを理解し、自分のキャラクターを他人がどのように演じているのかを知る上で、大いに役に立った。ドラマでは課外授業にこそ意味がある。読む楽しみも、観る楽しみも、演ずる楽しみも、そしてなんといってもすばらしい交友関係まで生まれるのだから。そしてすべては学生が自分の力で手に入れた喜びなのだ。



フランス語表現技法1(課題作文)

非常勤講師 前島 アンヌ・マリー

Cette année universitaire 2005-2006 a été une très bonne surprise pour moi bien que le cours destiné à introduire des œuvres contemporaines n'ait attiré que trois étudiants.

Les trois étudiants qui ont suivi ce cours étaient très motivés. Ils ont renforcé leur habilité à s'exprimer en français sur des sujets très divers issus des extraits d'œuvres présentés et à élargir leurs réflexions grâce aux avis argumentés de leurs camarades. Ils n'ont surtout pas hésité à donner leurs points de vue.

La réussite de ce cours tient essentiellement au fait du petit nombre d'étudiants qui a ainsi permis une meilleure relation élève-professeur.

2005年度の受講者は3名と少数でしたが、全員が積極的に授業に参加したお陰でとても充実した授業になりました。配布教材をもとに自分の意見をフランス語でまとめる練習を重ねた結果、受講者のフランス語表現能力も確実に伸びたと思います。

ロシア語聴解/ロシア語表現技法1,2

非常勤講師 熊野谷 葉子

前年度に続き、ロシア語3科目はそれぞれ「書く」「聴く」「話す」ことを重視した授業を行なった。各科目とも初学者がいたため初級文法を学びながらではあったが、学生のレベルと個性に応じた丁寧な指導ができたと自負している。宮澤淳一担当の「ロシア語表現技法2 ロシア語で発信しよう」では、インターネットやEメールを駆使してネイティブ話者との文通を進め、学生がロシア語のHPを作るまでになった。杉野由紀担当の「ロシア語聴解 ロシア語の音のシャワーを浴びよう」では、音声教材やラジオ・テレビをふんだんに使って聴く力を磨き、熊野谷担当の「ロシア語表現技法1 映画とドラマでロシア語を学ぼう」では、映画の台詞の暗誦や簡単なロールプレイング、お話を口頭で要約するなど、会話の基礎訓練をした。今年度の受講者も、ロシア語を学ぶ塾生の輪に加わって更に勉強する意欲を見せている。それが何より嬉しい成果である。

2006年度 外国語教育研究センター設置科目一覧

語種	地区	担当者	科目名
英語	日吉	レイサイド、ジェイムズ	英語最上級 アドバンスト英語
		シェイ、デビッド/ハンリ、マシュー	英語最上級 アドバンスト英語
		ノッター、デビット	英語最上級 アドバンスト英語
		スネル、ウィリアム	英語最上級 アドバンスト英語
		吉田 友子	英語異文化トレーニング
		横山 千晶	英語ドラマ
		武藤 浩史	英語翻訳
		中村 優治	英語テスト対策 TOEFL(Ⅹ)
		バトラー、アン	英語テスト対策 TOEFL(Ⅹ)
		水野 邦太郎	英語テスト対策 TOEFL(Writing)
		狩野 みき	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		狩野 みき	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		パロウス、リチャード	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		パロウス、リチャード	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ) Ⅹ上級)
		ギブソン、ロバート	英語テスト対策 IELTS(Ⅹ)
		和田 朋子	英語アカデミック・ライティング(Ⅹ)
		ファロン、ルース	英語オーラル・プレゼンテーション(Ⅹ) Ⅹ初級)
		横山 千晶	英語初級1 - 文法・作文・リーディング -
		横山 千晶	英語初級2 - 発音・リスニング・スピーキング -
		横山 千晶	英語研修
	吉田 友子	英語研修	
	三田	横川 真理子	英語最上級 アドバンスト英語
		アーマー、アンドルーJ.	英語翻訳
		中村 優治	英語テスト対策 TOEFL(Ⅹ)
		パロウス、リチャード	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		和田 朋子	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		横川 真理子	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		狩野 みき	英語テスト対策 TOEIC(Ⅹ)
		日向 清人	英語経済・金融(Ⅹ)
		日向 清人	英語法律・法務(Ⅹ)
		和田 朋子	英語アカデミック・ライティング(Ⅹ)
	ファロン、ルース	英語オーラル・プレゼンテーション(Ⅹ) Ⅹ初級)	
	ドイツ語	日吉	境 一三
鈴村 直樹			ドイツ語表現技法2 - ボキャブラリー・トレーニング -
三田		ゲラート、アンネ	ドイツ語表現技法3 - 初級文章表現法 -
フランス語	三田	三瓶 慎一	ドイツ語表現技法4 - 中・上級聴解・口頭表現 -
		ドゥッベル=タカヤマ、メヒティルド	ドイツ語表現技法5 - 中・上級文章表現法 -
フランス語	日吉	前島 アンヌ・マリー	フランス語表現技法1(Ⅹ) - 課題作文 -
	三田	ルカルヴェ、クリステル	フランス語表現技法2(Ⅹ) - DELF第1段階対応クラス -
		ルカルヴェ、クリステル	フランス語表現技法3(Ⅹ) - DELF第2段階対応クラス -
ロシア語	日吉	ペリセロ、クリスティアン・アンドレ	フランス語表現技法4(Ⅹ) - DALF対応クラス -
		山田 恒	ロシア語聴解 - ロシア語の音のシャワーを浴びよう -
	三田	熊野谷 葉子	ロシア語表現技法1(Ⅹ) - 映画とドラマでロシア語を学ぼう -
中国語	日吉	宮澤 淳一	ロシア語表現技法2(Ⅹ) - ロシア語で発信しよう -
		劉 穎	中国語聴解1(Ⅹ) Ⅹ上級) - 耳で中国語をキャッチしよう -
		呉 敏	中国語表現技法1(Ⅹ) Ⅹ上級) - 中国語作文・翻訳技法 -
	三田	関根 謙	中国語翻訳(Ⅹ) Ⅹ最上級)
		呉 敏	中国語表現技法2(Ⅹ) Ⅹ最上級)
スペイン語	日吉	山下 輝彦	中国語聴解2(Ⅹ) Ⅹ最上級) - 時事中国語 -
		蔣 文明	中国語表現技法2(Ⅹ) Ⅹ最上級) - 作文と翻訳 -
	三田	モジャーノ、ファン・カルロス	スペイン語表現技法1(初級)
インドネシア語	日吉	大楠 栄三	スペイン語表現技法2(中級)
	三田	安藤 万奈	スペイン語表現技法3(Ⅹ) Ⅹ上級)
アラビア語	日吉	野村 亨/トク、スハルディアント	インドネシア語ベーシック1
		野村 亨/トク、スハルディアント	インドネシア語ベーシック2
イタリア語	日吉	高田 康一	アラビア語
		高田 康一	アラビア語
イタリア語	日吉	ジョエ、イニャツィオ	イタリア語表現技法(Ⅹ) - ボキャブラリー・トレーニング -

アカデミック・ライティング・コンテスト2005報告

第5回目を迎えたアカデミック・ライティング・コンテストに、今年は高校生部門2名、大学生部門11名、計13名の応募があり、結果は下記の通りとなりました。大学生部門応募者の所属内訳は、経済学部3名、法学部4名、商学部、理工学部各1名、通信教育課程2名、学年は、3年生が3名、1、2、4年生が各2名でした。応募総数は去年より減少しましたが、応募者の出身学部・学年などの幅が広がり、センターの特徴がより強く表れたコンテストとなりました。

講 評

Perhaps the greatest matter for satisfaction this year is that the submitted entries covered such a wide variety of different specialist areas. There is a slight tendency to suppose that those in the humanities are more likely to be able to produce high-quality academic reports in a foreign language, but this year's winner showed that scientists can have an equal facility in a second tongue, and we hope this will encourage more entries in the future from those specializing in the sciences.

A matter for regret is that the number of entrants decreased this year. The organisers had been hoping that the considerable increase shown last year would establish itself as a trend. One possible contributing factor to this year's dearth was that there were very few entrants at high school level. This may have been because the deadline for submission was returned to its previous earlier date. The question of timing may need further thought next year.

Once again, too, the examiners were slightly perturbed by the number of incidences of inadequate referencing and unattributed quotation in some entries. This is often the by-product of enthusiastic and wide research, whereby the writer forgets that not only the information but the actual words in which it is couched have been taken from a certain source. Nonetheless, in this era of easily available digital information, it is precisely because this kind of borrowing is so easy to do that academics must be strictly aware of what is and what is not quotation.

アカデミック・ライティング・コンテスト審査委員長

法学部教授 James Raeside

In discussing the merits of the different candidates the judges once again found themselves looking for a paper which, together with a good command of English, properly balanced independent thought and argument with adequate supporting research. In the undergraduate student division, where we were pleased to be able to award three prizes, it can be said that the two runners-up were strong in one out of two of these two vital areas, while the First Prize winner had both a clear original thesis and plentiful references to supporting research. This is the goal towards which we hope all future candidates will aspire.

審査結果

所長賞

該当者なし

大学生部門優秀賞

矢澤 和明 (理工学部 4年)

"Introduction of bioinformatics exercises in Science class"

大学生部門次席

筋 智子 (法学部 3年)

"The Conservation of Biological Diversity"

望月 優大 (法学部 2年)

"Muslims In Europe: Why Is It So Difficult?"

高校生部門優秀賞 該当者なし

高校生部門次席

桑原 杏奈 (湘南藤沢高等部 2年)

"Alien Species Import Must Be Banned: How these Exotic Animals Damage Japanese Ecosystem"



新設科目紹介「イタリア語表現技法」 パニーニをひとつ？

文学部教授 白崎 容子

エスプレッソやカプチーノとともにメニューに並ぶようになった「パニーニ」、なかに挟まったイタリア産チーズやハムの香りがただよってきます。が、「パニーニをひとつ」注文してはだめ！paniniはpaninoの複数形です。ひとつなら「パニーノ」と注文しましょう。スパゲッティも同様です。もしも1本落ちていたらスパゲット。辞書にはspaghettiの形で載っています。ジェラートgelatoもすっかり日本語に馴染みました。これが動詞gelare「凍らせる」の過去分詞が名詞化した形、とわかれば、イタリア味のジェラートも、納得してなめることができるかもしれません。食文化をはじめ、デザイン、スポーツなどの分野を中心に私たちのまわりにあふれるイタリアの言葉たち。これらを自在に操ることができれば、たのしさも倍増することでしょう。

4月から日吉キャンパスに「イタリア語表現技法 ポキャブラリートレーニング」が開講します。イタリア語とすら認識しないうちにいつの間にか知っている単語たち、これらをすべて掌のなかにおさめて自由に使いこなすこと、そして、さらに、新しい語彙を増やして世界を広げること、これが授業の狙いです。

田丸公美子氏講演会 開催決定



外国語を活かして実社会で活躍されている方からお話を伺う当センター主催の講演会、2006年度の第一弾は、田丸公美子氏をお招きし、下記の通り開催することが決まりました。

田丸氏は国際会議通訳者として第一線で活躍している日本屈指のイタリア語通訳者・翻訳家であるとともに、一方で、その類まれな話術と教養とウィットを駆使して書かれた抱腹絶倒の著書『パーネ・アモーレ イタリア語通訳奮闘記』（文藝春秋）などでも知られる人気エッセイストです。本講演会は、教養研究センター日吉行事企画委員会(HAPP)との共催で、入学歓迎行事の一環として開催いたします。新入生はもちろん、在校生や教職員の参加も大歓迎です。ぜひ足をお運びください。

日時：2006年4月24日(月)16:30～18:00

会場：日吉 来往舎シンポジウムスペース

(場所は変更になる可能性があります。)

開催直前にポスター、ホームページ等でご確認ください。)

参加費無料、事前申込不要

プロジェクトスペース竣工について



研究活動が本格化し、さらに今後の活動を推進していく中で、作業スペースの不足が問題となっていました。今回、第3校舎3階のホール部分を改築し、外国語教育研究センターの研究プロジェクト活動用の研究スペースを設けました。テレビ会議にも完全対応し、スクリーン3面を備えています。当センターの研究が活発な議論と円滑な作業によってますます発展するよう、ラウンドテーブルと鮮やかな色彩の椅子を用意しました。さらに、教材開発用のワークステーション4機も導入する予定です。

ALC NetAcademyについて

本年度よりALC社のTOEIC対策用オンライン学習教材NetAcademyを導入しました。こちらは日吉・矢上キャンパスの学生を対象とした学習支援サービスで、両キャンパスの固定情報端末からアクセスが可能です。利用にはCNSログインとパスワードが必要となります。利用方法の詳細については、<http://flang.keio.ac.jp/alc/>をご覧ください。

編集後記

「Newsletter Vol. 8」をお届けします。今回はいつもより4ページ多い12ページになっていることにお気づきでしょうか。これは、巻末に当センターの年次報告を掲載したためです。毎年、こうして年次報告をまとめる作業に携わっておりますと、センターの事業が確実に拡大、発展していることを実感します。教育面では設置科目が増え、英語ワークショップなどの新企画が登場し、海外研修の研修先も増えました。また、研究面でも各プロジェクトの研究活動がセンター発足2年半を経てそれぞれに成果を挙げつつあり、2006年度はさらなる発展段階へステップアップすることになるでしょう。こうした状況にあわせ、センターのホームページもこの春からリニューアルされます。Newsletterと併せてご覧いただければ幸いです。

外国語教育研究センター「Newsletter」編集担当 山口 昌子

慶應義塾大学外国語教育研究センター2005年度事業報告 (2005.4.1-2006.3.31)

主要人事

所 長 迫村 純男 (2003.10.1-2005.6.30)
金田一 真澄 (2005.7.1-2005.9.30)〔新任〕
金田一 真澄 (2005.10.1-2007.9.30)〔重任〕
副 所 長 境 一三 (2003.10.1-2005.9.30)
境 一三 (2005.10.1-2007.9.30)〔重任〕
吉田 友子 (2004.10.1-2005.9.30)
吉田 友子 (2005.10.1-2007.9.30)〔重任〕
森 泉 (2005.8.1-2005.9.30)〔新任〕
森 泉 (2005.10.1-2007.9.30)〔重任〕
嘱託所員 倉館 健一 (2005.4.1-2006.3.31)〔新任〕

教育

1. 外国語教育研究センター設置科目開設
日吉 37科目、三田 36科目

2. 学部併設の科目開設
延べ163科目(日吉のみ)

3. 夏季外国語セミナー(第34回)
期間:9月13日~16日(3泊4日)
場所:慶應義塾立科山荘
参加者:94名 参加講師:15名
開講コース:
英語プレゼンテーションコース
TOEFL対策コース
TOEIC対策コース
英語ドラマコース
英語で環境学Planet Earth(上級)コース
フランス語コース
中国語コース

4. 海外研修
ニュー・サウス・ウェールズ大学(オーストラリア)
2006年2月5日~3月12日(5週間)
参加者:24名
カリフォルニア大学サンタクルーズ校(米国)
2006年2月12日~3月19日(5週間)
参加者:28名

5. Academic Writing Contest
ワークショップ
三田:6月21日開催、日吉:6月28日開催
講師:和田 朋子

コンテスト

受付期間10月20日~31日
応募数 13件(大学生部門11、高校生部門2)
授賞式 12月21日

6. 英語ワークショップ

ビジネス・プレゼンテーション・ワークショップ
10月20日
講師:トビン,ロバート(商学部教授)
アカデミック・プレゼンテーション・ワークショップ
11月11日
講師:シェイ,デビッド(商学部助教授)
ジャズ・チャンツ・ワークショップ
11月17日
講師:グレイハム,キャロリン(Jazz Chants考案者)

7. 講演会

「ハリー・ポッターの魔法とは!？」 5月12日
(日吉行事企画委員会と共催)
講師:松岡 佑子(同時通訳者、翻訳家、静山社社長)
「言葉を学ぶ意味」 10月11日
講師:國枝 孝弘(総合政策学部助教授)
ドイツ映画月間【ドイツ・トーキー映画の70年】
11月7日~12月5日(計10回)
解説:柴田 陽弘(文学部教授)、三瓶 慎一(法学部助教授)、北條 彰宏(法学部助教授)、森 泉(理工学部助教授)

研究

1. 研究プロジェクト

政策提言プロジェクト
(代表:境 一三)
自律学習・ICTプロジェクト
(代表:古石 篤子)
英語プレースメントテストプロジェクト
(代表:ギブソン,ロバート)
慶應義塾の英語一貫教育を考えるプロジェクト
(代表:松原 一宣)
異文化間コミュニケーションプロジェクト
(代表:吉田 友子)
e-learningプロジェクト
(代表:倉館 健一)

Annual Report

2. 研究行事

- 講演会 「Using Computer and Internet to enhance Intercultural Learning」 4月1日
 講師：Bernd Rüschoff（ドゥースブルク・エッセン 大学教授）
- 自律学習・ICTプロジェクト主催 パネルディスカッション
 「テレビ会議は外国語教育を変えることができるか」
 7月25日
- 自律学習・ICTプロジェクト主催 シンポジウム
 「ICTを活かした新しい学習環境の構築のために」
 12月20日

会議

- 運営委員会
 5月19日
- 学事委員会
 4月28日、5月27日、6月30日、7月27日、9月26日、
 10月18日、11月8日、12月6日、1月17日、3月7日
- 刊行物編集小委員会
 7月12日、12月13日

刊行物

- 『慶應義塾 外国語教育研究』第2号
 2005年3月31日発行
- 「Newsletter」
 Vol. 5 2005年6月15日発行
 Vol. 6 2005年9月30日発行
 Vol. 7 2005年12月15日発行
 Vol. 8 2006年3月31日発行

施設環境

- 日吉第3校舎3階「外国語研究室2」開設

「Newsletter」記事一覧

記事	号	頁
【教育】		
2005年度設置科目履修状況	5	1-2
新設科目紹介「インドネシア語ベーシック」	5	3
新設科目紹介「英語異文化トレーニング」	5	3
新設科目紹介「イタリア語表現技法」	8	8
設置科目講師の紹介	6	4-5
設置科目、2005年度を振り返って	8	5-6
2006年度設置科目一覧	8	7
夏季外国語セミナー実施概要	5	8
夏季外国語セミナー報告	7	2-3
アカデミック・ライティング・ワークショップ	6	3
アカデミック・ライティング・コンテスト	8	4
海外研修2004年度報告	5	7
海外研修2005年度実施概要	7	8
英語ワークショップ実施概要	6	8
英語ワークショップ報告	7	4-5
松岡佑子講演会「ハリー・ポッターの魔法とは!？」	5	5
國枝孝弘講演会「言葉を学ぶ意味」	7	1
ドイツ映画月間【ドイツ・トーキー映画の70年】	7	8
e-learning教材「NetAcademy」について	5	7
SFC中高ディベートワークショップ	7	7
一貫教育校の外国語教育(4) 湘南藤沢高等部	5	6
一貫教育校の外国語教育(5) 幼稚舎	6	7
一貫教育校の外国語教育(6) 中等部	7	7
一貫教育校の外国語教育(7) 女子高	8	3
【研究】		
政策提言プロジェクトCEFRの研究	7	6
政策提言プロジェクト：CEF勉強会	8	3
自律学習・ICTプロジェクト：2004年度実験授業	5	4
自律学習・ICTプロジェクト：2005年度実験授業	8	2
パネルディスカッション「テレビ会議は外国語教育を変えることができるか」	6	6
Hiyoshi Research Portfolio 2005参加報告	8	1
英語プレースメントテストプロジェクト活動報告	6	7
Bernd Rüschoff講演会	5	5
プロジェクトスペース竣工	8	8
【その他】		
新所長あいさつ	6	1
新副所長紹介	6	8
嘱託所員紹介	5	8
センター発足から2年を振り返る	6	2

外国語教育研究センター運営委員（任期：2005年10月1日～2007年9月30日）

外国語教育研究センター所長	理工・教授	金田一 真澄
外国語教育研究センター副所長	経済・教授	境 一三
外国語教育研究センター副所長	理工・助教授	森 泉
外国語教育研究センター副所長	商・助教授	吉田 友子
外国語教育研究センター本部事務長		鹿沼 昭彦
大学文学部長・大学院文学研究科委員長	文・教授	関場 武
大学経済学部長	経済・教授	塩澤 修平
大学法学部長・大学院法学研究科委員長	法・教授	小此木 政夫
大学商学部長・大学院商学研究科委員長	商・教授	桜本 光
大学医学部長・大学院医学研究科委員長	医・教授	池田 康夫
大学理工学部長・大学院理工学研究科委員長	理工・教授	稲崎 一郎
大学総合政策学部長	総合・教授	小島 朋之
大学環境情報学部長	環境・教授	富田 勝
大学看護医療学部長	看護・教授	佐藤 蓉子
大学院経済学研究科委員長	経済・教授	池尾 和人
大学院社会学研究科委員長	経済・教授	杉浦 章介
大学院法務研究科委員長	法務研究科・教授	平良木 登規男
大学院政策・メディア研究科委員長	環境・教授	徳田 英幸
大学院経営管理研究科委員長	経管研・教授	池尾 恭一
大学院健康マネジメント研究科委員長	看護・教授	吉野 肇一
文学部日吉主任	文・教授	坂上 貴之
経済学部日吉主任	経済・教授	羽田 功
法学部日吉主任	法・教授	朝吹 亮二
商学部日吉主任	商・教授	橋本 順一
医学部日吉主任	医・教授	古野 泰二
理工学部日吉主任	理工・教授	大谷 弘道
大学通信教育部長	文・教授	西脇 与作
高等学校長	理工・教授	山田 邦博
志木高等学校長	法務研究科・教授	井田 良
女子高等学校長	女子高・教諭	梅岡 淳子
湘南藤沢中等部・高等部長	総合・教授	井下 理
普通部長	普通部・教諭	能條 孝行
中等部長	文・教授	山本 英史
幼稚舎長	理工・教授	福川 忠昭
ニューヨーク学院（高等部）長	法・教授	迫村 純男
外国語学校長	経済・教授	西尾 修
メディアセンター所長	経済・教授	杉山 伸也
日吉メディアセンター所長	経済・教授	伊藤 行雄
インフォメーションテクノロジーセンター所長	環境・教授	萩野 達也
日吉インフォメーションテクノロジーセンター所長	経済・教授	中山 純
大学言語文化研究所長	文・教授	中川 純男
大学国際センター所長	理工・教授	小尾 晋之介
大学日本語・日本文化教育センター所長	商・教授	友岡 賛
大学教養研究センター所長	法・教授	横山 千晶
日吉キャンパス事務長		田辺 久夫

Annual Report 年次報告

外国語教育研究センター学事委員

(任期：2005年10月1日～2007年9月30日)

所長	理工・教授	金田一 真澄
副所長	経済・教授	境 一三
副所長	理工・助教授	森 泉
副所長	商・助教授	吉田 友子
英語語種別主任	経済・助教授	石井 明
ドイツ語語種別主任	経済・教授	鈴村 直樹
フランス語語種別主任	法・助教授	笠井 裕之
ロシア語語種別主任	法・教授	山田 恒
中国語語種別主任	文・教授	山下 輝彦
スペイン語語種別主任	経済・助教授	石井 康史
諸国語語種別主任	文・教授	白崎 容子
一貫教育校主任	普通部教諭	跡部 智
高等学校兼担所員	高校教諭	持原 なみ子
志木高等学校兼担所員	志木高教諭	森山 徳之
女子高等学校兼担所員	女子高教諭	梅澤 直美
SFC中・高等部兼担所員	SFC中・高教諭	土岐 麻里
普通部兼担所員	普通部教諭	跡部 智(兼)
中等部兼担所員	中等部教諭	江波戸 慎
幼稚舎兼担所員	幼稚舎教諭	清水 賢
外国語学校主事	経済・助教授	Ainge, Michael W.
学事委員会の指名による	経済・教授	伊藤 行雄
"	経済・教授	西尾 修
"	法・教授	朝吹 亮二
"	法・教授	武藤 浩史
"	商・助教授	種村 和史
"	理工・助教授	井上 京子
"	総合・助教授	國枝 孝弘
"	センター助手	倉館 健一
本部事務長	本部事務長	鹿沼 昭彦 (2005.11.1-2007.9.30)

設置科目担当講師

文・教授	Armour, Andrew
文・教授	中村 優治
文・助教授	Snell, William
文・訪問講師(招聘)	Duppel=Takayama, Mechthild
経済・教授	中山 純
経済・助教授	松岡 和美
法・教授	久我 俊二
法・教授	Raeside, James
法・助教授	三瓶 慎一
商・助教授	Shea, David
総合・教授	野村 亨
総合・訪問講師(招聘)	Suhardijanto, Totok
非常勤講師	Butler, Ann
非常勤講師	Burrows, Richard
非常勤講師	日向 清人
非常勤講師	Fallon, Ruth
非常勤講師	水野 邦太郎
非常勤講師	横川 真理子
非常勤講師	和田 朋子
非常勤講師	Gellert, Anne
非常勤講師	Pelissero, Christian André
非常勤講師	前島 アンヌ・マリー
非常勤講師	Le Calvé, Christelle
非常勤講師	熊野谷 葉子
非常勤講師	杉野 由紀
非常勤講師	宮澤 淳一
非常勤講師	呉 敏
非常勤講師	蒋 文明
非常勤講師	劉 穎
非常勤講師	安藤 万奈
非常勤講師	大楠 栄三
非常勤講師	Uechi, Nancy
非常勤講師	高田 康一

学事委員以外の兼担所員および訪問所員

兼担所員 (任期：2005年10月1日～2007年9月30日)

訪問所員 (任期：2005年4月1日～2006年3月31日)

専門委員会委員		
文・教授	斎藤 太郎	
文・助教授	片木 智年	
商・助教授	佐藤 望	
商・助教授	許 曼麗	
商・助教授	種村 和史	
総合・教授	古石 篤子	
総合・教授	重松 淳	
総合・教授	堀 茂樹	
高校教諭	折笠 敬一	
高校教諭	松原 一宣	
幼稚舎教諭	伊藤 扇	

Newsletter

Mar. 2006. Vol. 8

慶應義塾大学外国語教育研究センター
KEIO RESEARCH CENTER FOR
FOREIGN LANGUAGE EDUCATION

発行日 2006年3月31日

代表者 金田一 真澄
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111(代表)
E-mail fcenter@info.keio.ac.jp
http://www.fcenter.keio.ac.jp/